

宝永災害 300年



1

1707年(宝永4年)

の今日、東海から四国沖を震源とするマグニチュード(M)8.6という史上最大級の地震が日本列島を襲った。地盤の液化化や無数の余震が続き、12月には富士山も大噴火、未曾有の連動型災害になった。300年たった現在、私たちの備えは十分か。当時の様子を振り返りながら、防災体制の課題を検証する。

笹沢敦一、米山龍彦

富士山も噴火

土佐藩の武士が書いた「宝永大變記」には、この日昼前に起きた地震で甚大な被害を受けた町並みが究明につづられている。

「人家倒れ或は崩れ無難に有之家は一軒も無之(中略)大夕流れ入り人家悉く流失す 死人は浅

3 地震連動 周期400年前後か

東海・東南海・南海

を組かしく牛馬犬猫に至迄大半死す。大きな揺れで家屋が無残に壊れ、午後に襲ってきた津波に家々が地域ごとのみ込まれた様子が目に浮かぶ。「大地震底より汐の涌き出」のような液状化現象の発生も描かれている。

翌29日には静岡県富士宮市周辺で大きな余震が発生し、本震で倒壊を免れた家を崩壊させた。触れられるように12月16日、富士山が噴火。火山活動は16日間続き、火山灰は偏西風に乘って江戸の町にも降り注いだ。

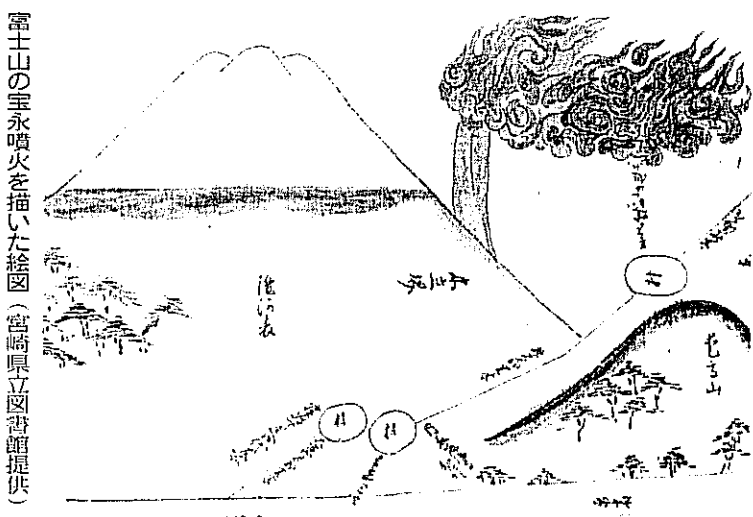
永は同時に起きる連動型の巨大地震となった。東海・四国を震度6.7級の強い揺れが襲い、死者は50000人を超えたという。

「阪神大震災は前兆」の見方も

887年、1361年も発生
「連動型の地震は340〜480年周期で起きている。宝永の次は2世紀前半に発生する可能性がある」と語るのは東京大学の都市計画学教授(津波・古地震学)の津波・古地震学だ。過去9回の南海地震について、連動型はどれか、古文書の記録で調べた。その結果、全国各地が強い揺れに見舞われた887年、大阪市で宝永地震よりも津波の浸水範囲が広がった。1361年の地震が連動型だったとわかった。

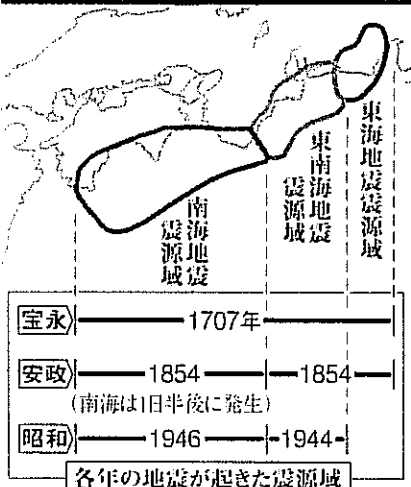
さらに過去の南海地震では、発生40年ほど前から近畿地方でM6.7級の内陸型の地震が起きていたことを都司准教授は発見。1995年の阪神大震災を前ぶれの始まりと考えば、次の南海地震は40年後の2035年ごろに起き、その際には連動型になる恐れがある」と指摘する。

海洋研究開発機構の研究チームは発生予測をにらみコンピューターによる再現を試みている。これまでに「連動型が起きた後は、単発の地震の発生間隔が短くなり、規模も徐々に小さくなる」という過去の地震の特徴をうまく再現した。堀高峰サブリーター(地震学)は「地震の発生間隔などの誤差はまだ大きい。が、地震を起すプレート(岩板)境界の条件を適正なものに合わせれば、次の地震の発生形態や発生確率の計算ができるようになる」と展望を語る。



富士山の宝永噴火を描いた絵図(宮崎県立図書館提供)

巨大地震の想定震源域



では、巨大地震が、いま日本を襲いたら……。被雷軽減に役立つようなのが気象庁の「緊急地震速報」だ。地震の初期微動をとらえ、大きな揺れを事前に警告するシステムで、テレビなどを通した一般向け情報提供が今月始まった。同行によれば、東南海と南海の想定震源域の境界(紀伊半島沖)が震源となった場合、直下型に比べ、揺れの到達に少し時

「緊急地震速報」で防災

間がかり、半島の先端を除くほとんどの地域に「警告」を事前に伝えられる見通しだ。同行は、両地震が同時発生した場合に見込まれる1万人超の死者を速報の利用によって半分近く減らせると試算する。もっともこの値は国民が家の耐震補強をし、速報を聞いて身を守る行動をとれることが条件だ。地震速報の検討会座長も務める阿部勝征・東大名誉教授(地

震学)は「速報を聞いて机の下に隠れても、家がつぶれては元も子もない。一部屋でも耐震補強することが大切」と話す。津波に襲しても、今は警報が発せられる。聞いた沿岸住民はすぐに高台に逃げるように」と強調している。大災害は繰り返す。過去の教訓を将来の減災につなげられるかは、私たちの判断や行動にかかっている。

宝永地震から富士山の噴火まで(新暦)

1707年	10月23日	宝永地震
	29日	宝永地震の最大余震
	11~12月	富士山中でたびたび地震
	12月16日	富士山の噴火
08年	1月1日	噴火終了